

日々の生活の中でいつ壁に触るだろうか。

私は暗闇の部屋にいるとき、無意識に壁に触っていた。

私たちは、暗がりの中壁に触れて空間を認識し、モノが溢れた部屋で記憶を頼りに歩く。

光が最小限の部屋で、身体的な感覚に身を委ねながら生活し、私は壁と会話する。



# 暗がり と 記憶

法政大学大学院 石井陸生 / 小瀬木駿

## 00: 私の壁

夜眠りから覚めると、いつもの部屋が暗闇に包まれていて困惑する。  
深夜に目が覚めたようだ。

電気をつけたくてもスイッチはベッドから部屋の向こう側だ。  
縫るように手を伸ばすと壁に触れた。

「私はそこにいたのか」

私の脳内に展開された部屋に私の位置がピン打たれた。

足を運ぶと、記憶によって空間が浮かび上がってくる。

たどり着いた先は月明かりに照らされ、いつもと違う場所のようだった。

壁は私たちが思っている以上に抛り所になっている。暗闇の部屋で、私たちは壁に触れ空間を認識する。

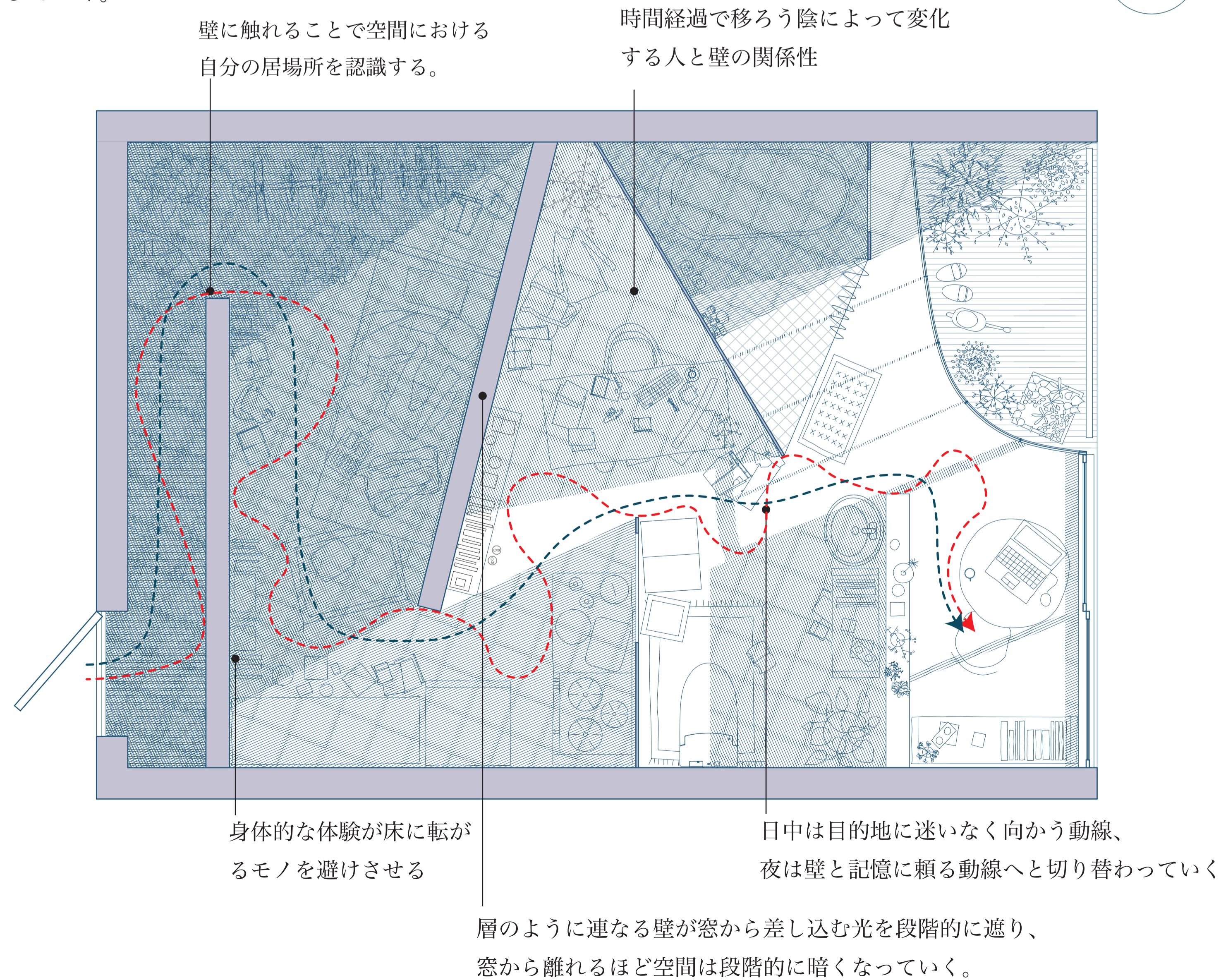
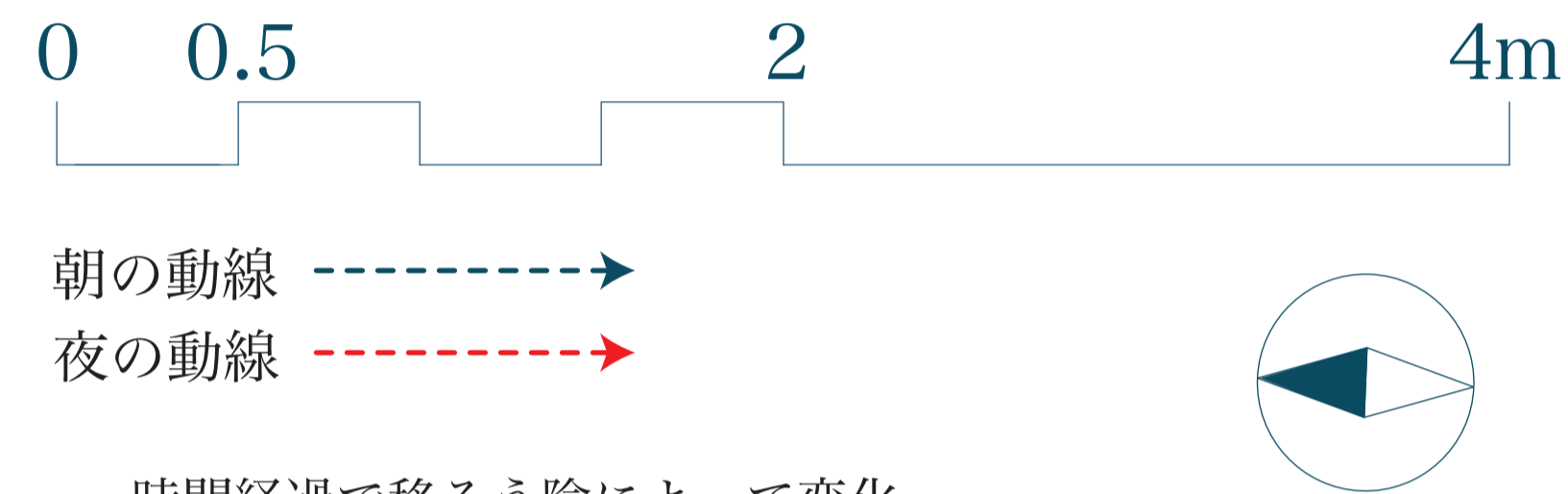
# 01: 最小限の光と暮らす



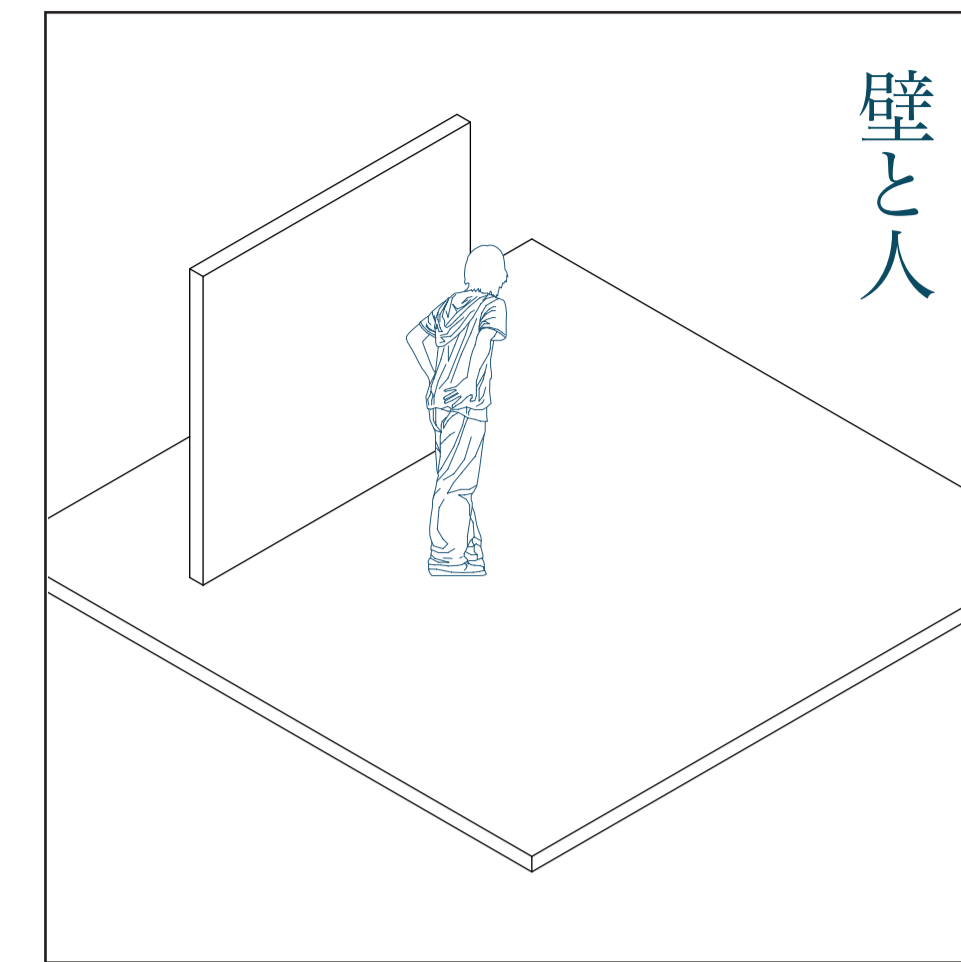
私たちの生活は心理と身体の両面において影と壁に身を委ねて生活していると感じた。  
 そこで、照明のない部屋でのライフスタイルを提案する。  
 太陽の光に委ねる生活において壁と人間の関係性は刻一刻と変化する。日中は壁を避けるように動き回り、陽が落ちるに連れてグラデーショナルに壁に縋るようになっていく。  
 壁との関係性を感じ取り、身体的な感覚に身を委ねながら生きることこそが壁との会話であるのではないだろうか。

# 02: 多層的な壁

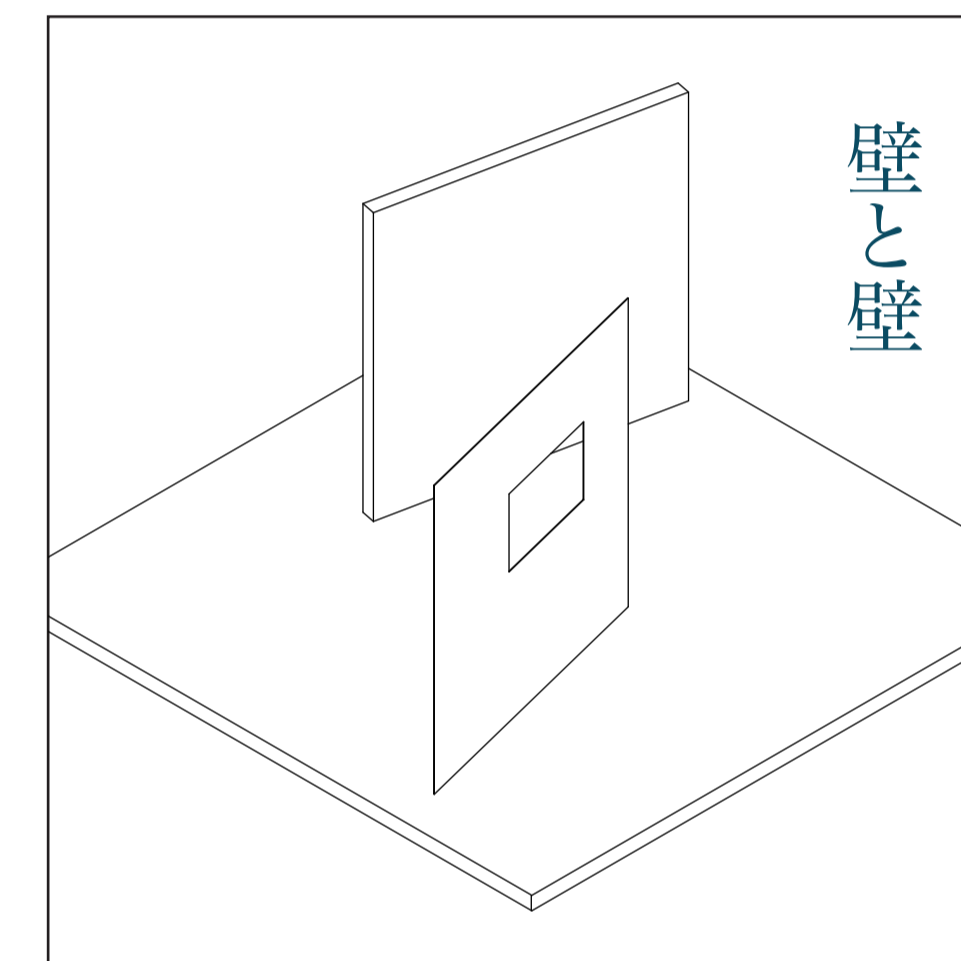
層のように壁を連ねることで部屋のどこにいるかによって壁との心理的な距離が移ろい、生活の中で壁との関係性を身体的に感じながら暮らしていく。



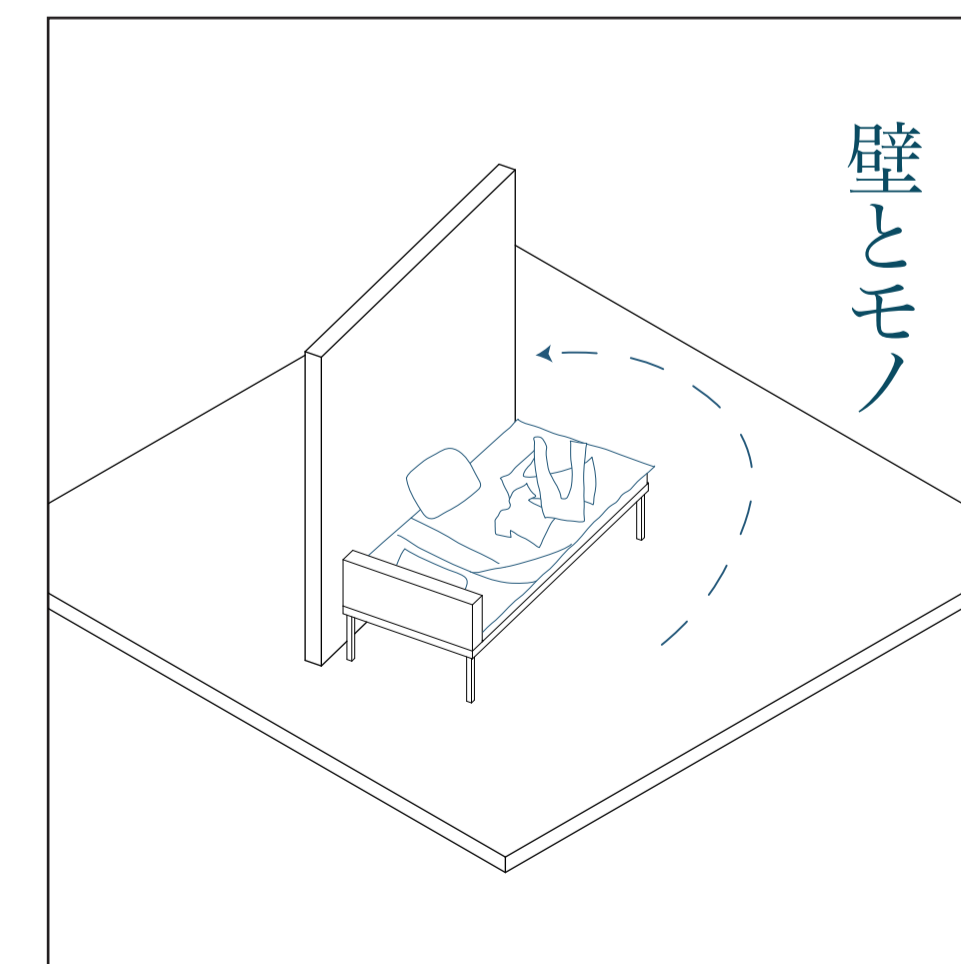
# 03: 生活を構成する要素の関係性



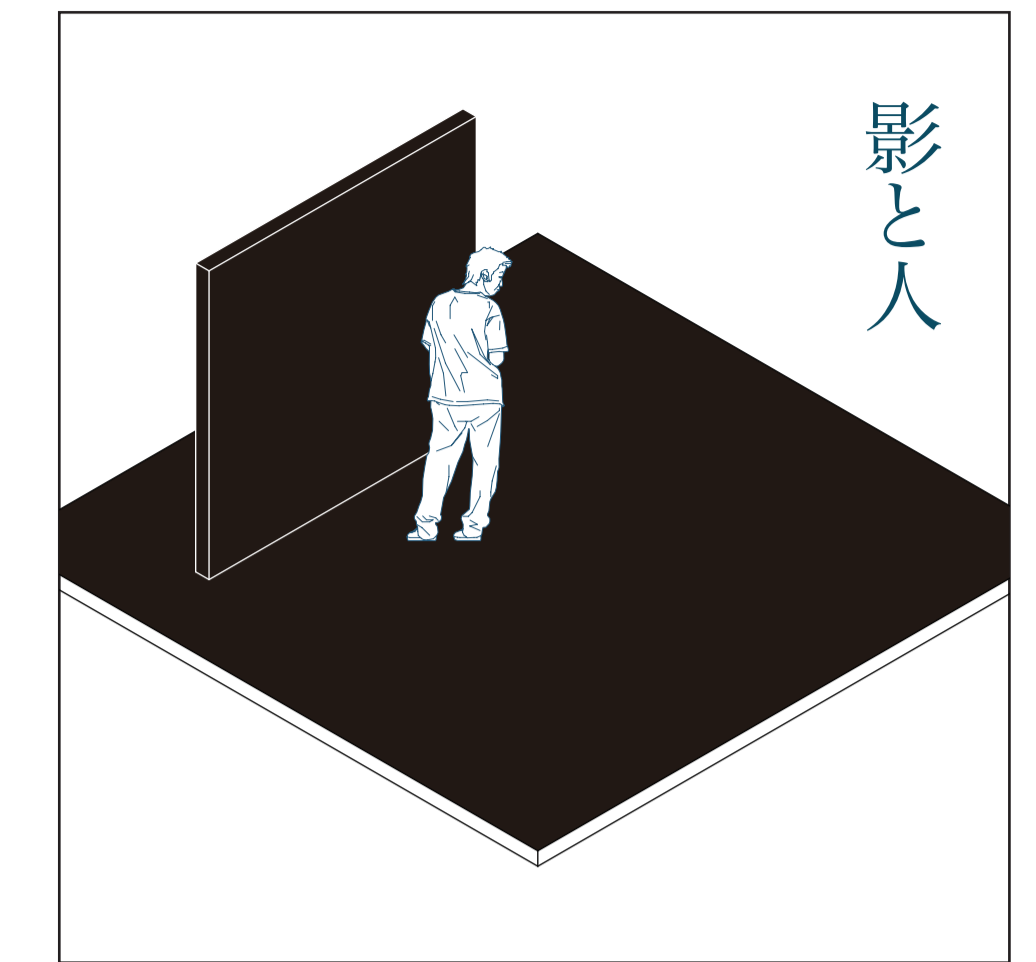
日中、人は壁を意識せずに生活するが夜になると壁に縋り、生活する。1日の中で、壁のヒエラルキーが変化する



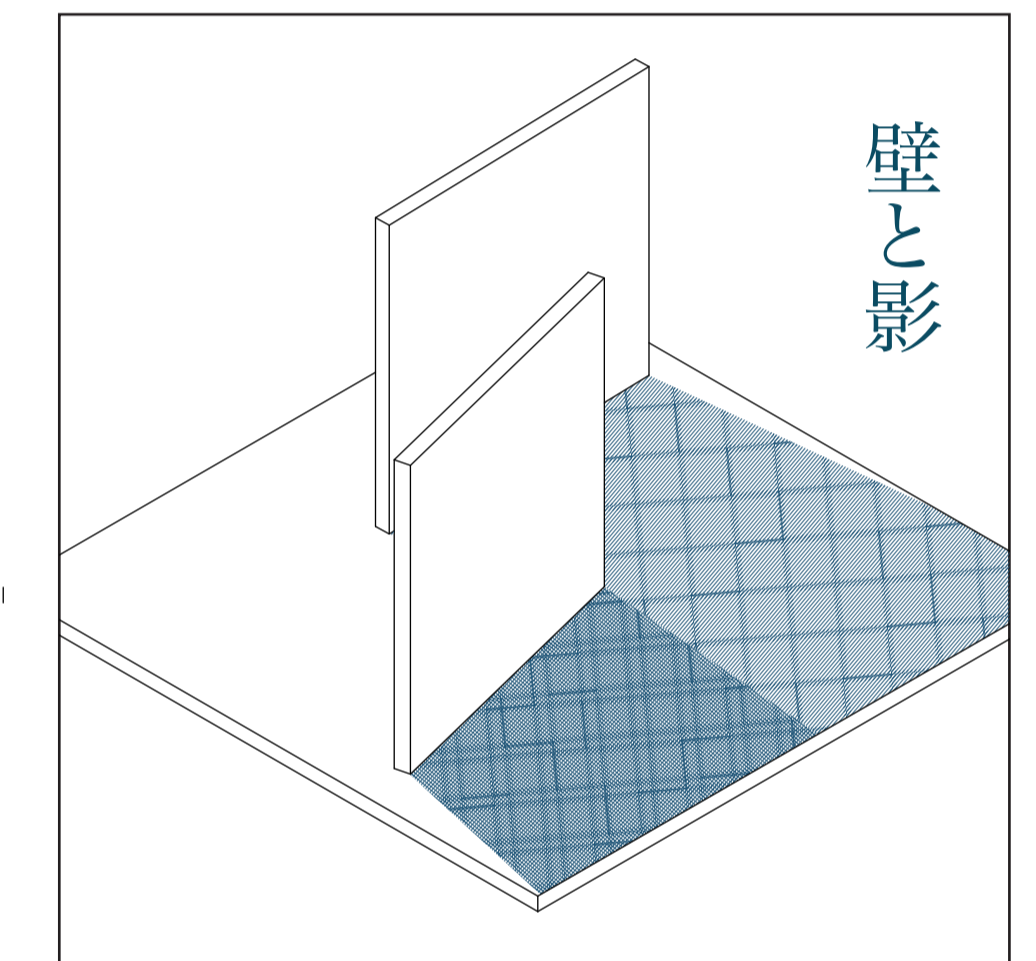
薄い壁と厚みのある2種類の壁で全体が構成される。壁の薄さは開口に現れ、シーンが切り取られたピクチャーウィンドウとなる



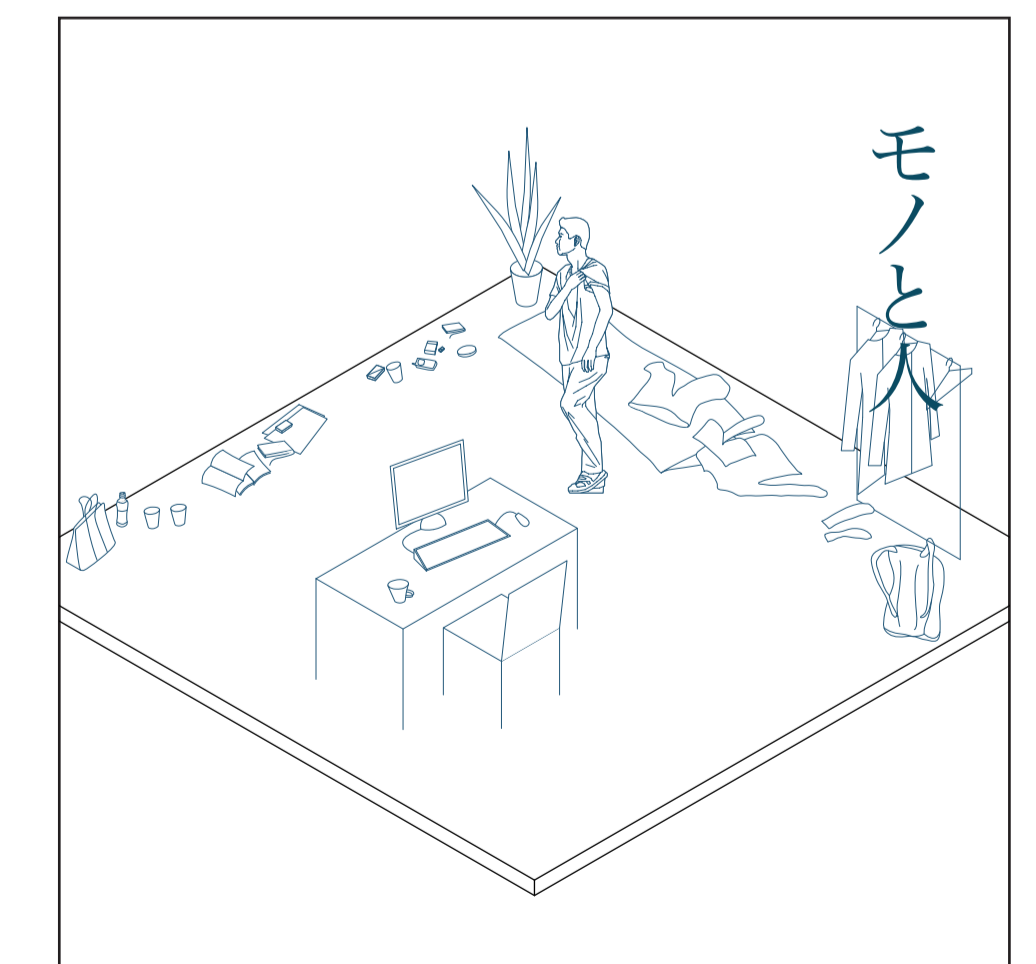
モノが壁に沿って置かれる。暗闇の中で、モノが溢れる部屋の中では、それらを身体的な感覚で避けるように動線がふくらむ



人は影の中では空間を認識できない。視覚情報の失われた暗闇の中で、記憶や身体的感覚に身を委ねて生活する



壁は光を遮断し、影をつくる。壁が多層的に重なることで、影が部屋の中でグラデーショナルとなり、様々な暗さの空間をつくる



暗闇の中で、視覚情報だけでなく、モノを置いたことや動かしたことの記憶が部屋の中での空間体験をつくる

## 04: 壁に触れる生活

6月25日（木）午前6:20



目を覚ますと、壁と天井の隙間からほのかに漏れる光を見て朝になったことを知る。私はその僅かな光を頼りに壁の位置を探る。自分の居場所に目処をつけ、歩きだすと外はすっかり陽が登っていた。キッチンでコーヒーを淹れ、窓際へとまた移動した。ベランダから流れてくる風を受けて一日の始まりを感じている。

10月16日（木）午後16:43




部屋の中心に位置する机で作業をしていると、気づけば手元が暗くなっている。顔を上げると陽が落ち、夜が近づいている。私は作業を中断し、片付けをしていると、完全に陽は落ち、私は手探りで移動を始める。壁を触りながらより暗がりになっている方へと進み、やがてベッドへとたどり着いた。ベッドの上に散らかる服を床に転がして私はすぐ眠りについた。

12月8日（木）午前3:26



真夜中に目が覚めた。トイレに行きたいが、あたり一面に広がる暗闇が私を心細くする。壁だけを頼りに自分の位置を認識し、頭の中でさっき床に置いた雑誌のことや脱ぎ捨てた服のことを思い出しながら歩いていく。進んでいくと徐々に月明かりが私の周りを照らしはじめ、最後には壁に頼らずともトイレにすわることができた。安堵した面持ちで部屋に差し込む月明かりに伸びる陰を眺めていた。



時に、居場所を。

時に、道標を。

時に、暗がり記憶を。

壁との会話とは、壁が生み出すそれらに気づくことなのかもしれない